

風の本 黒井千次



風の絵本 黒井千次 講談社



風の絵本

昭和四十九年六月二十四日第一刷発行

著者 黒井千次

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社／東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号／一―二―

電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表）振替／東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

© Seiji Kuroi 1974, Printed in Japan 落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。(文1)

△発表年月▽

蠟燭の家

「季刊芸術」昭和四十八年・第二十四号

虫

「群像」昭和四十五年十月号

風の絵本

「群像」昭和四十八年七月号

目次

蠟燭の家

虫

風の絵本

5

49

95

裝
幀
司
修

風の絵本

蠟燭の家

電燈が消えた時、彼はテーブルの脇に立っていた。彼の妻は冷蔵庫の前にいた。テーブルの反対側を廻って、それぞれダイニングキッチンから居間にはいるところであった。風呂から出たばかりの身体に白いネグリジェを着た妻は、食卓の上から幾つかのみかんを掴みあげていた。さめた焙じ茶を一杯飲む短い間、ガウンを羽織ってテレビのゴルフ番組を見よう、と彼は思っていた。

目の前の空間を吹き消すように、いきなり明りが消えた。暗くなったというより、一瞬、別のどこかに投げ出された感じだった。あら、今日だったかしら、と闇のそう遠くはないところで妻が言った。おぼろげな記憶が自分の中にもあるのに彼は気づいた。一枚の

黄色い紙だった。

——状差しを見てごらんよ。

——懷中電燈がわからないのよ。

——そういえばあれは電池がもう……。

居間に置かれた本棚の上から二段目の左隅、丈の低い本を石のブックエンドでおさえつけた横に狭い隙間が出来ている。セロテープやマツチ箱、ムヒやボールペンやオブラートなどのはいった細長い籐の籠が棚隅の隙間に押しこまれている。懷中電燈はその籠の中か、あるいは籠のごく近くに置かれている筈だった。

——あの子がこの前いたずらをして……。

——肝心かなめの時になれば、なんのための懷中電燈かわからない。

——あの時はまあ、整理だんすの自分のおべのひき出しにいられたんですからね。

——むこうの部屋にあるのかな。

手探りしたために指先が粉っぽかった。明日の朝になれば、薄くたまった本棚の埃の上に獣の爪跡みたいな指の痕跡が残っているかもしれない、と彼は思った。戸をあけて子供達の寝ている部屋に妻のはいっていくのが気配でわかった。その時になって、火というも

のが光も放つことに彼はようやく気がついた。居間の床に一カ所、汚れた水がこぼれたように赤黒い光が漂っている場所があった。鈍い光は床を這い、カーテンの裾をおぼろに照らしたがその上にまでよじのぼる力はない。彼に背を向けてガストーブが小さく鳴りながら燃え続けていた。

あつたあつた、と叫んだのは彼の方だった。部屋の中に火が燃えていて、それが微かながらも光を発している、つまり、家の中は今真暗闇ではないのだ、という事実にはげまされて、懷中電燈が自分から姿を現わしたみたいだ、と彼は思った。どこにありました、とききながら妻が大股にふとんをまたいで居間にもどって来るらしい。ここ、こことテレビの上を叩いてから、彼は親指の腹で懷中電燈のスイッチを押した。

——わかった。夕方テレビの裏に紙飛行機がとびこんだといって、チビコがのぞいていたんだわ。

そのスイッチには奇妙に肉感的な手応えがあった。点滅するだけではなく、点燈してからなおもスイッチを前方に押しつけると光の輪が縮って明るさが急激に絞りこまれて来る。指の押し具合一つで光の容貌が微妙に変化した。

——二人ともね、おふとんをけとばして毛布だけで寝ているの。

まだ重なり合わない二重の光の輪の中に、状差から半身をのり出している黄色い紙が
みとめられた。光の輪は弱々しく、異常に赤味を帯びている。

停電のお願い

毎度お引立にあずかりありがとうございます。このほど「電線張替工事」のため、や
むを得ず下記により電気を止めさせていただきますのでよろしくお願い申しあげます。

停電日時 十一月二十六日

午前零時十三分より

午前六時十二分まで

雨天の場合、十一月二十七日の同時刻。

停電の時にはご使用中の電気器具のスイッチを切るか、あるいは電気器具をコンセ
ントから必ずはずして下さい。暗闇の中は危険ですから無用の行動はつつしみ、送電
の再開か夜明けを静かにお待ち下さい。十一月二十六日の日出時刻は六時二十七分で
す。念のため。

東部電力株式会社 多摩支社

そうじゃない、やっぱり、と彼の手もとをのぞきこんで妻が言った。クリーム匂いが肌からかかった。アメリカ製らしいそのナイトクリームの匂いを彼は嫌いだ。いや、クリームをつけた女を彼は嫌いだ。た。まるでてらてら光るビニール製の人形みたいになってしまふ……。

——これはしかし、余計なお世話だな。

——暗闇はどうして危険なのかしら。

——未開人の思想だね。

——無用の行動というのにはなに。

——電気がなければ出来ないことだら。

——わア、暗くないと駄目なことだって、アリマスウ。

あれ、そうですか、と応じようとして、彼にはそれが少し大儀だった。風呂から出たばかりの肌は体毛が立って十分に感じやすくなっていたのだが、その目的をとげるまでの過程を思うとやや気が重かった。だから、彼が呟いたのは別のことだ。

——あれ、これはあしたの夜中のことではないのか。

——今日ですよ。もう十二時過ぎたんだもの。

妻の言葉にさそわれて彼は手の中の光を壁の掛時計に向けた。振子の上の小さな窓から日付と曜日の文字が傾いて消えかけ、次の字が下から這い上って来るまでの混乱した短い時が過ぎようとしているらしかった。はじめてそれを見たわけではないのに、闇の中でむこう向きになって下着でもとりかえている老婆を目撃してしまったような間の悪さをおぼえて、彼は光を閉じた。

時計の上の日付けで確かめることは出来なかったのだが、目の前の闇が二十六日の未明にかけて行なわれる停電によるものであることは間違いなかった。

——蠟燭はどこにあったっけ。

闇が理由あるものだと思えると、彼は俄かに自分が落ちつきを取りもどすのをおぼえた。明りが消えれば、蠟燭を立てて火をともし、という仕来りの中に自然に身体が滑りこんでいく。

——懐中電燈があればいいんじゃないありません？ どうせもう寝るでしょう？

——子供達が夜中に起きた時のために蠟燭があった方がいい。

——だからそれには懐中電燈が……。

——電池がもう危いんだ。

——そう……。長いのを何本か封筒にいれて、どこかにしまつてあつた筈だけど……。

——台風が来るといふんで荒物屋で買った奴があつたな。

——いつかお婆あちゃんが覚えて、西側の雨戸が重いから敷居に蠟燭を塗るといいよといわれて探した時はあつたのだから……。

懷中電燈も蠟燭も、決してすぐ手の届く場所に整えられてはいない。しかし腹立たしいというより、彼はその事態にむしろ軽い満足をおぼえていた。

懷中電燈が出て来たように、結局は蠟燭も現れるに違いない。突然襲いかかれた闇を押し返すために、彼は家の中で多くの仕事をしなければならなかった。光の鈍くなった明りを振り振り、蠟燭を求めてあちこちと探しまわる時、彼にとってこの小さな家は耕つくされた畑ではない。二人の子供と一人の女性を闇から守るために、林を走って枯枝を集め、落葉を盛って火をおこすのだという大げさな空想が彼をよろこばせた。

——子供達は大丈夫ですよ。

妻は、自信があるというより、問題にはならないことを告げる時の軽い口調で彼に言った。たしかに、二人の子供は単純に闇に怯える年頃を過ぎている。